

近畿の下川津B類土器をめぐって

中川二美・秋山浩三

1. はじめに

今回の調査では、弥生時代後期土器が主に99-5区～7区から集石遺構1を中心としてまとまって出土した。これらの土器の大半は後期前葉から中葉にかけての時期に属すると考えられるが、複数の地域からの搬入品と思われる土器も含まれている。当遺跡における過去の発掘調査においても、後期段階での搬入土器については指摘がおこなわれており、その地域も瀬戸内地域から近江地域など様々である。近年の調査でも同様に多くの地域からの搬入品の出土が報告されている（東大阪市教育委員会2002）。

以下では弥生後期の搬入土器のなかでも、本調査での出土量が比較的多かった讃岐地域（香川県）からの搬入品を中心として、他地域との人の往来を示す土器の検討を加え、当該期の瓜生堂遺跡の位置づけもおこなってみたいと思う。

なお本稿では、河内地域以外の地域で製作されたと考えられる土器を搬入土器、河内地域で製作はされているが、従来の在地技法とは異なる方法で製作された土器を外来系土器と呼称する。

2. 瓜生堂遺跡出土の讃岐産土器

（1）搬入土器の認定方法

今回、讃岐産土器としてあげたものは、その胎土に角閃石を含み、暗茶褐色を呈するという特徴を備えている。このような特徴は、河内地域でも生駒山西麓産土器に認められるものである。しかし、讃岐や播磨地域でも従来より、同様の胎土をもつ土器の存在が「雲母土器」などの呼称で指摘されてきた。また、讃岐の下川津遺跡では、「下川津B類土器」として角閃石を含む胎土の土器が分類されている。

このような個体は、讃岐地域でも主体を占める土器群ではなく、分布範囲は比較的広いものの、讃岐地域で通有に製作された土器とは製作技法などの点で一線を画すとの指摘もなされている。またその製作地も、高松平野の旧香東川流域とされる比較的狭い範囲に限定できるという（大久保1990、同1995、図437）。

以上のように、胎土の特徴は河内地域の生駒山西麓地域との類似性も認められるが、今回の検討対象とした土器群は、器形や製作技法などに河内地域では認められない特徴も同時に有しており、搬入土器として抽出できるものと考えられる。

また今回、瓜生堂遺跡の調査で検出された讃岐産と分類できる土器や、その他、播磨地域や摂津・河内地域で讃岐産とされる土器は、そのほとんどがこの下川津B類土器、またはその影響下にある土器とみなすことができる。よって、他の讃岐産の土器と区分するためにも、従来の研究史に基づいて下川津B類土器と呼称したいと思う。

なお、この下川津B類土器は、認識が讃岐地域でさえも未確立だった研究段階においては、その胎土や色調の類似性から、近畿地方では生駒山西麓産土器だろうと一般的には誤認されていた。したがって10年ほど前までは、“瀬戸内地方の特徴を備えた中河内産の土器”というような理解が支配的であった。

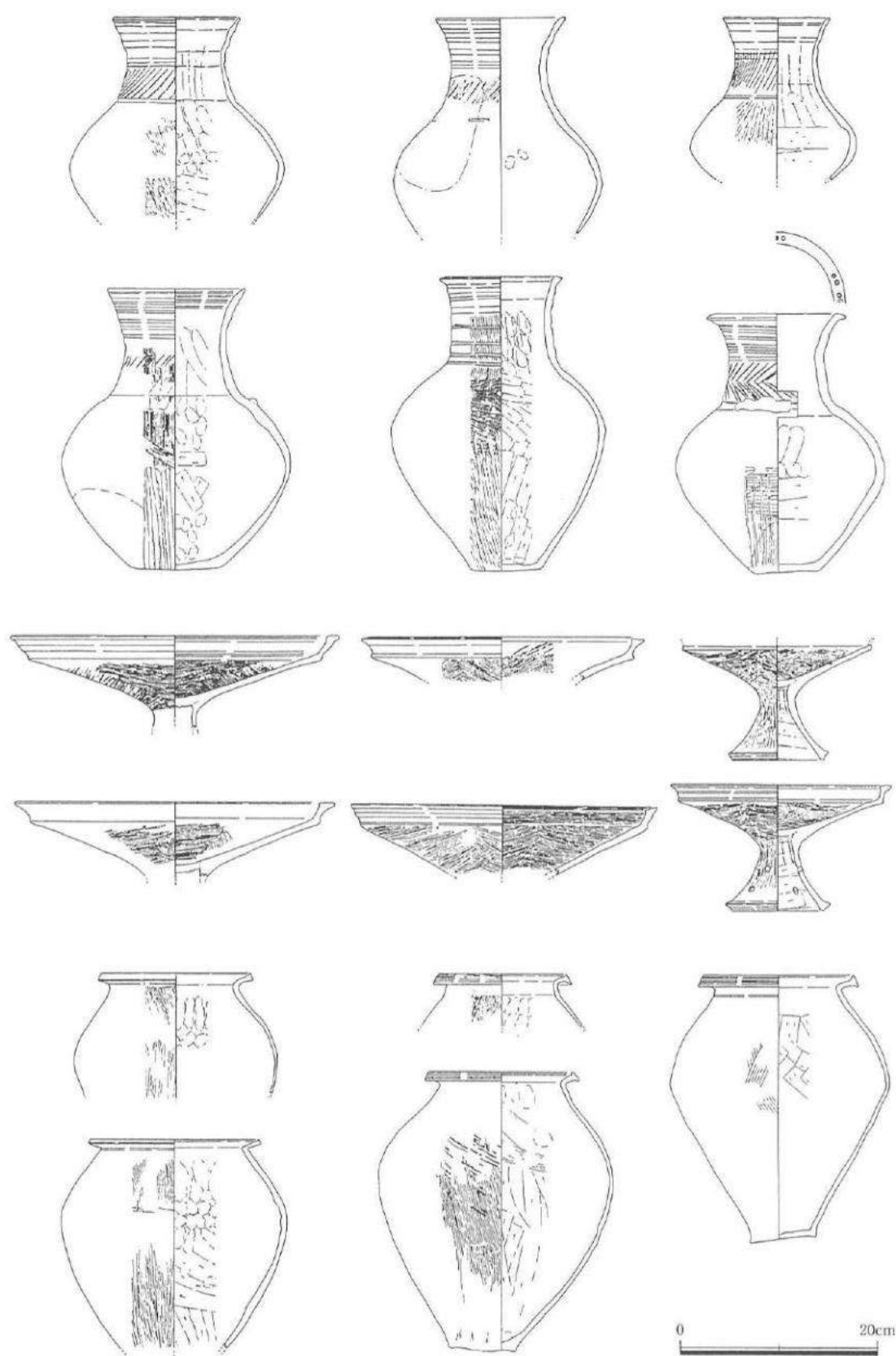


図437 下川津B類土器の壺・高杯・甕（高松市上天神遺跡出土例）

このように、生駒山西麓産と讃岐産・下川津B類土器の胎土は、一瞥しただけではかなり酷似する。だが、両者のちがいに關しては、今回出土の瓜生堂遺跡例において觀察するかぎり、下川津B類土器と共伴した生駒山西麓産土器を比較すると、下川津B類土器の方が、①胎土素地（基質）自体の粒度が比較的細かくしかも均質、②角閃石ほか含有される鉱物片の粒度が小さく加えて量がやや少ない、③焼成具合がより硬質である、という諸特徴が把握できる（秋山2002）。この差異を下川津B類土器とされる他の個体にも普遍化できるかどうかは、今後の詳細な觀察事例を増やす必要性があるが、峻別基準への一定の見通しとなる可能性が高いであろう。

（2）今回出土の下川津B類土器の概要

本調査で出土した讃岐産・下川津B類土器は、図438・439、写真12～14に示したように壺1点、高杯1点、甕8点と、煮沸具の甕が多数を占める。以下では、あらためて土器個々の諸特徴について簡単に述べておきたいと思う。

壺（8、写真13、本書報告No5273） 底部は欠損しているものの、上半部の調整などはよくわかる。まず、口縁から頸部外面にかけて凹線状の8条の沈線がめぐり、頸部から体部上半にかけてはハケの痕が認められる。また、頸部には、ハケ状工具を短い間隔で静止させながら一周させ、列点文状の文様効果をもたせた調整も確認される。体部下半はほとんど残存しないが、縦方向のヘラミガキで仕上げられると推測できる。内面は、体部下半部に横方向のヘラケズリがおこなわれ、上半部には指頭圧痕が特徴的に残る。全体的な形態は、図438-6の高槻市古曽部・芝谷遺跡出土例との類似性が指摘できよう。

高杯（9、写真14、本書報告No5275） 脚柱部はわずかに残存するのみであるが、外面をナデ、内面をヘラケズリで仕上げている。杯部は口縁端部を拡張して面を作り、上面に擬凹線をめぐらせる。調整はヘラミガキで仕上げるが、河内地域で通有に認められる放射状におこなうミガキとは異なるものである。つまり、内外面ともに全体をいくつかに分けて、外面は横～斜め方向に、内面は横に近い方向にヘラミガキで仕上げている。このようなヘラミガキの施し方は「分割ヘラ磨き」と呼称され、下川津B類土器に特徴的に認められるとともに、高い割合で採用されている手法である。

甕（17～24、本書報告No5020・5139～5141・5235・5244・5245・5297） 完形に復原されるものは少ないものの、底部まで残存する個体では平底状を呈する。口縁は端部をやや上方につまみ上げる個体も存在する。外面は全体をハケで整えた後、底部から器高中位ほどまでヘラミガキをおこなう。内面は底部から最大径あたりまでをヘラケズリした後、上部をナデで整えているため、指頭圧痕が顕著に残る。器壁は、同時に出土した多数の在地産甕よりも、かなり薄く作られているのも特徴の一つである。

以上、各器種ごとに述べてきたが、特に今回やや個体数が多く出土した甕については、河内地域在地の土器と比較して、その調整方法など製作技法に強い画一性が認められる。さらに、先に述べたように高杯の調整方法など甕以外の器種においても、弥生中期段階の伝統を強く固執し続けるという指摘もあるように、その製作技法に強い規範の存在を指摘できよう。

3. 下川津B類土器の移動状況

下川津B類土器が讃岐周辺地域へと移動していることは、従来から指摘されていることである（今里1977、ほか）。本稿では、播磨地域と摂津・河内地域、つまり兵庫県下および大阪府下で確認されている弥生時代後期段階での下川津B類土器の集成をおこなった²⁸⁾。その結果は表32に、出土遺跡の分布図は図440に示した。



図438 瓜生堂遺跡の下川津B類土器（壺・高杯）と大阪府下類例

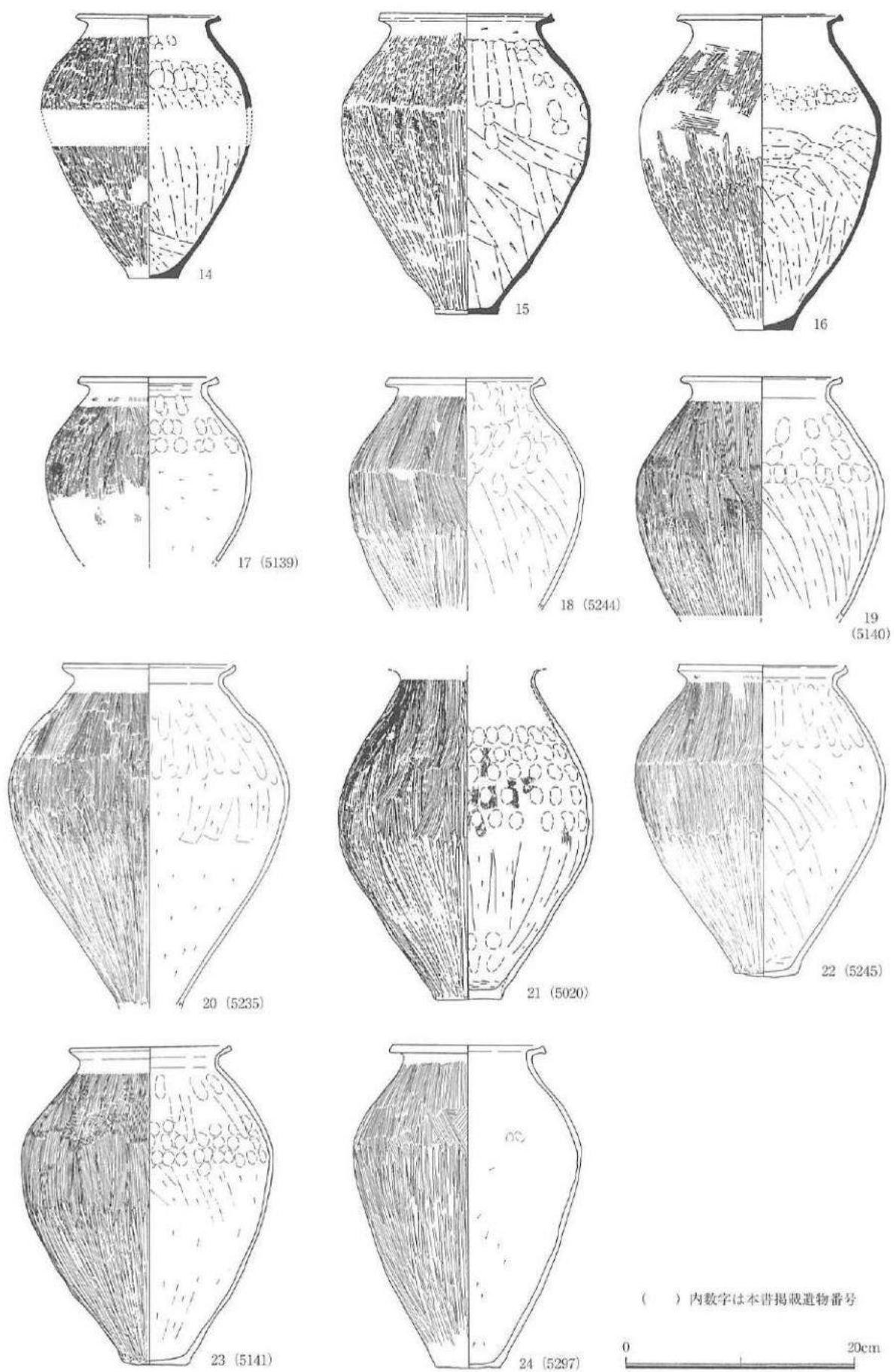
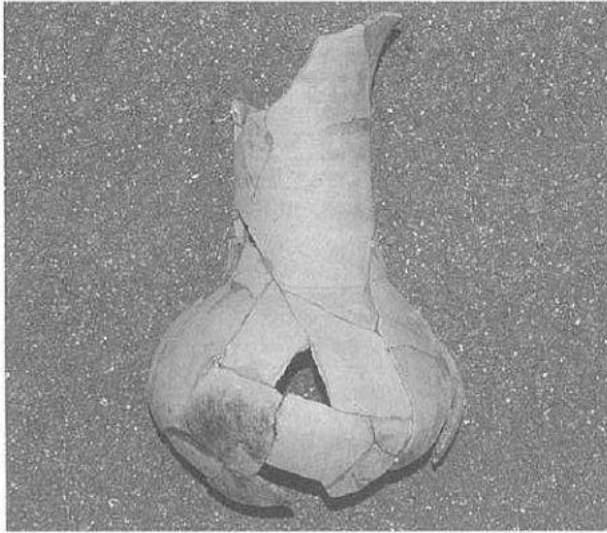


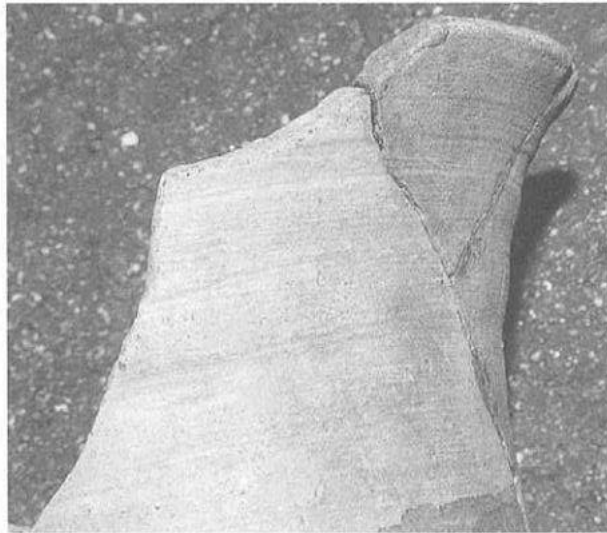
図439 瓜生堂遺跡の下川津B類土器（甕）



(1) 全体外面



(4) 体部外面



(2) 口頸部外面



(5) 体部内面



(3) 頸部外面



(6) 胎土詳細

(図438-6 個体)

写真12 瓜生堂遺跡の下川津B類土器・壺（大阪府教委試掘調査出土）



(1) 全体外面



(4) 頸部外面



(2) 口縁部内外面



(5) 頸体部外面



(3) 口頸部外面



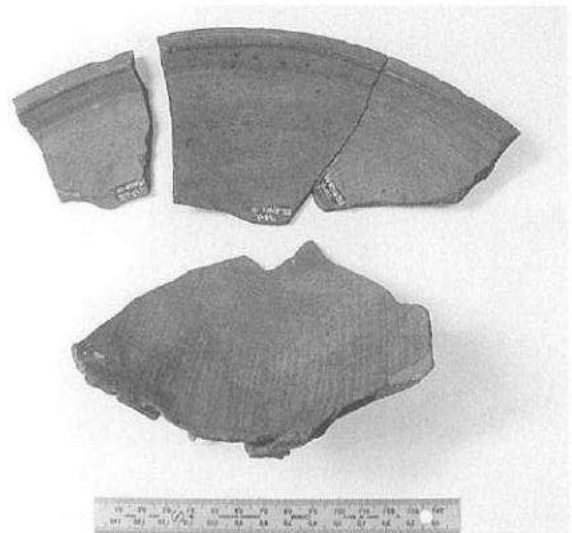
(6) 胎土詳細

(図438-8 胴体)

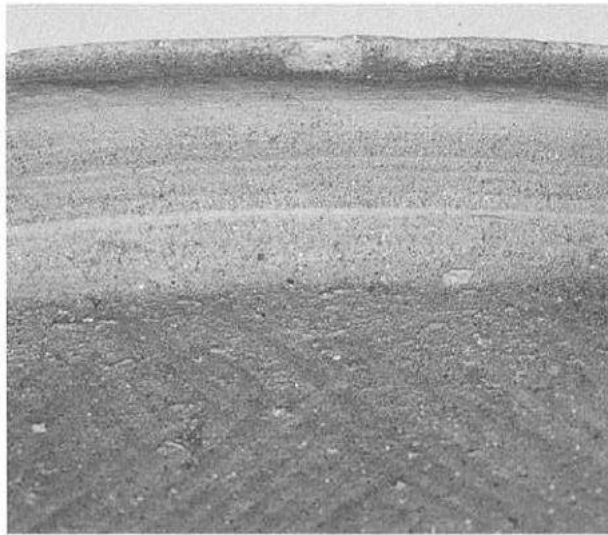
写真13 瓜生堂遺跡の下川津B類土器・壺 (99-6区出土)



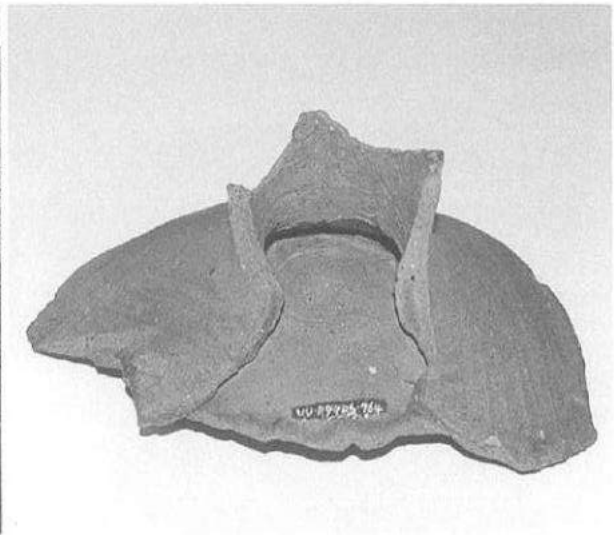
(1) 全体外面



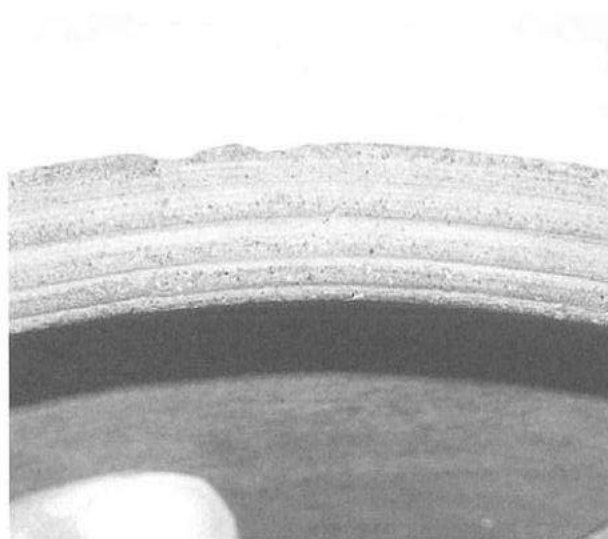
(4) 全体内面



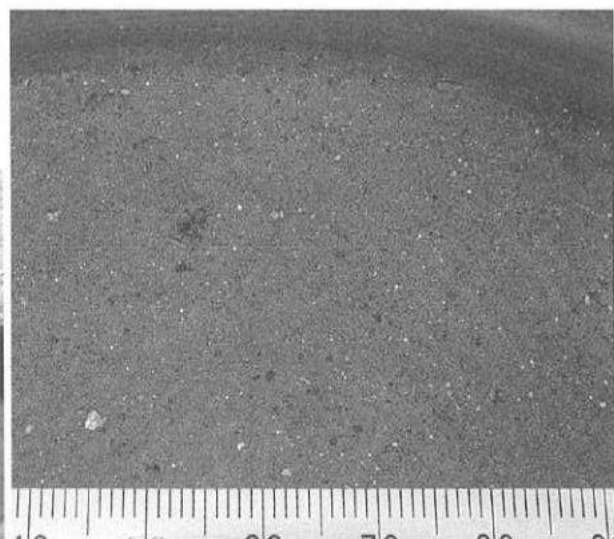
(2) 口縁部外面



(5) 杯・脚接合部



(3) 口縁部上面



(6) 胎土詳細

(図438-9 個体)

写真14 瓜生堂遺跡の下川津B類土器・高杯(99-6区出土)

まず時期的な変遷をみると、播磨地域に持ち込まれた下川津B類土器は、弥生後期後葉から庄内式併行期を中心として確認されている。これに対して、摂津・河内地域（大阪府内）で確認された諸例は、弥生後期前葉から中葉にかけてであり、播磨地域とは時期が異なる。また、摂津・河内ではかぎられた遺跡に少量しか確認できないことも指摘できる。さらに、集成などについては畑暢子氏の研究（畑1998）に詳しいが、確実な庄内式併行期以降にいたると、「四国系複合口縁壺」（讃岐産・下川津B類土器ほか）の大形壺が多く地域で確認され、広範囲に運ばれたり、各地でその影響を受けたと推定できる製品がみられるようになる。すなわち、大阪府内でも、弥生後期までと比較してその搬入量や影響の受け方も大きくなるという傾向も読みとることができよう。このような大形壺は土器棺として使用されたり、墳墓にも持ち込まれるなど特殊な性格をおびた土器ということもでき、その讃岐からの拡散の背景にも様々な考えが示されている。

一方、瓜生堂遺跡出土の下川津B類土器の時期については、先述したように高杯の形態などから弥生後期前葉から中葉にかけての頃と考えられる。この時期の大阪府内で搬入例が認められる遺跡は、瓜生堂遺跡のほかにも高槻市古曽部・芝谷遺跡や八尾市亀井遺跡などの遺跡があげられる。しかし、将来的に増加する可能性は残るものの、今のところこれらのかぎられた遺跡以外では確認ができない。この時期の土器様相全体を考えると、土器の製作、特に高杯の製作において近畿地方では瀬戸内地域の影響が広まり、さらに東進して東海地方にまで達することが指摘される時期であり、関連性に注意される。

また、大阪府内における下川津B類土器の出土遺跡をみると、青銅器の鋳型や鉄製品が出土し、それぞれの地域における拠点集落と考えられる大規模な遺跡である。特に古曽部・芝谷遺跡は、前段階から継続する拠点集落である安満遺跡と有機的に関係しながら成立したという評価もある遺跡であり（西谷1999、ほか）、ことに分銅形土製品も出土し瀬戸内地域との関連性が高い遺跡である。同じく亀井遺跡でも分銅形土製品が出土している（大阪府文化財調査研究センター1995、秋山1986b、ほか）。さらに、同時期に瀬戸内地域との影響関係が強く認められる点は、瓜生堂遺跡についても今回出土した在地の土器群をみるならば同様であることが理解できる。

次に、搬出された下川津B類土器の器種構成について考えてみたい。兵庫県（特に播磨地域）では、ほぼすべての器種が確認されている。一方で、先にあげた大阪府内の遺跡においては、その器種構成に偏りが認められる。つまり、瓜生堂遺跡のみ甕が検出されており、その出土量も最大なのである。さらに、模倣土器のあり方をみてみると、兵庫県川島遺跡でその存在が指摘されているが、大阪府内のどの遺跡でもその出土は確認されてはいない。したがって、同じく下川津B類土器が移動しているといっても、播磨地域への移動と摂津・河内地域への移動の意味合いは本来的に異なるものであったといえるだろう。

以上をまとめると、瓜生堂遺跡とほぼ同時期の下川津B類土器は、河内湖周辺各地域の拠点集落に集中的に持ち込まれたものと考えられる。また、それらの拠点集落は、瀬戸内地域との関係性を強く示す遺跡である。先に述べたように、弥生後期前葉から中葉にかけての時期は、土器も瀬戸内地域の影響が広域に認められるようになる時期である。いうまでもなく、下川津B類土器を製作していた高松平野も瀬戸内地域の一部である。したがってこの地域の土器の移動は、これら瀬戸内地域全体の動きに連動したものと考えることができるのではないだろうか。

加えて、下川津B類土器がごく一部の地域でしか模倣されないという事実は興味深い。河内地域の土器様相に目を移したとき、「瀬戸内地域の影響」の存在は従来から指摘されてきたことである。しかし、

表32 下川津B類土器集成表

番号	遺跡名	所在地	時期	遺構	器種
1	瓜生堂	東大阪市	後期前葉～中葉		壺・高杯・甕
2	巨摩	東大阪市	後期前葉～中葉		壺・高杯
3	亀井	八尾市	後期前葉～中葉		高杯
4	古曽部・芝谷	高槻市	後期前葉～中葉		壺・高杯
5	芥川	高槻市	後期前葉～中葉		壺
6	戸田	三木市志染町	後期後葉～庄内	溝	壺
7	出合	神戸市西区	後期後葉～庄内		甕
8	吉田南	神戸市西区	後期後葉～庄内	溝	壺・甕
9	大中	加古郡播磨町	後期		甕
10	小山V地点	姫路市延末	後期後葉～庄内	土壇?	壺
11	船場側東第2地点	姫路市飾磨区	後期後葉～庄内	溝	壺・甕
12	長越	姫路市飯田	後期後葉～庄内	住居址7	甕
				住居址9	甕
				住居址10	甕
				土坑2	甕
				落込1	甕
				大溝	壺・甕
13	権現	姫路市飾磨区	後期後葉～庄内	河道	甕
14	丁・柳ヶ瀬	姫路市勝原区	後期後葉～庄内	溝	壺・甕
15	川島	揖保郡太子町	後期後葉～庄内	溝	壺・甕・高杯
16	上溝	揖保郡太子町	後期後葉～庄内	溝	壺
17	片吹	龍野市菅田町	後期後葉～庄内	河道	壺・甕
18	宝林寺北	揖保郡揖保川町	後期後葉～庄内	包含層	甕・小型埴
19	門前	揖保郡揖保川町	後期後葉～庄内	河道	甕・小型埴
20	北山	龍野市揖西町	後期後葉～庄内	溝	壺・甕・小型埴
21	養久・谷	揖保郡揖保川町	後期後葉～庄内	溝・包含層	壺・甕
22	本位田	佐用郡佐用町	後期～庄内	溝	甕

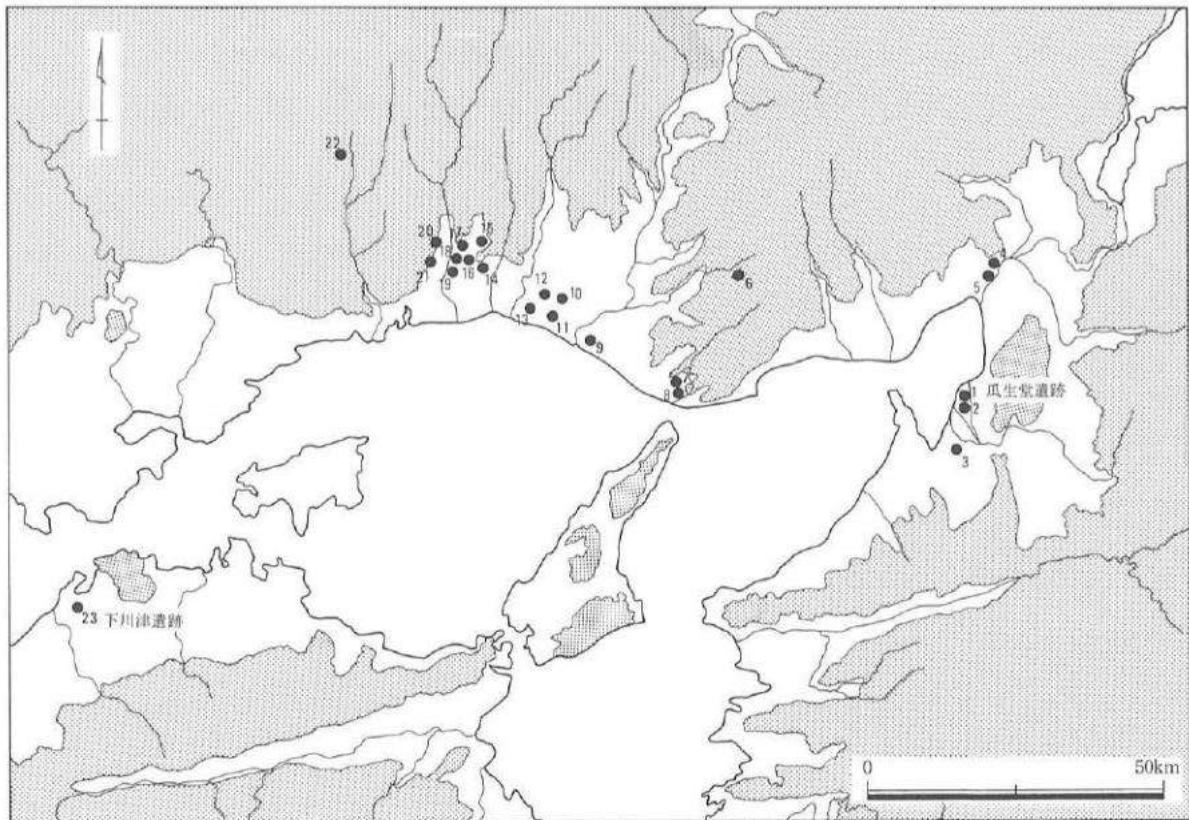


図440 下川津B類土器出土遺跡分布図

瀬戸内地域のなかでも、どの地域の土器の製作技法から影響を受け、どの地域のものは採用されないかを、これまで明確には峻別されてきてはいない。今後はこのような土器製作技法の受容の背景や様相差を明らかにしていくことが重要であろう。

4. 瓜生堂遺跡の位置づけ

今まで述べてきたように、下川津B類土器は瀬戸内地域全体の動きのなかで、大阪府内の河内湖岸各遺跡へと持ち込まれたものと考えられる。大阪府内出土の他遺跡と比較して、瓜生堂遺跡出土の土器は、その器種構成が異なる。また、その出土量も多いことも特徴としてあげることができよう。

弥生土器の移動形態を検討した都出比呂志氏や秋山の分類によれば、全器種が移動する背景には生活様式をとまなう人々の移動が考えられる（都出1989、秋山1986a、同1989）。今回の瓜生堂遺跡で出土した下川津B類土器には器種として鉢が欠落しているが、もともとこの土器群には鉢の存在自体が不明確であるという指摘もなされており、これをのぞけば貯蔵・供膳・煮沸のすべての器種がそろっていることになる。以上、出土した器種構成から考えると、瓜生堂遺跡に讃岐地域からの人々の移住があったと考えられるのである。

瓜生堂遺跡は従来から瀬戸内地域から人々が移住してきたと考えられている遺跡である（西谷1999、ほか）。今回の調査で同時に出土した土器群も、甕の口縁の形態や内面ヘラケズリ技法など瀬戸内地域からの影響下で製作されたと考えられる土器が多い。他にも、本書図218-5101のように、備後地域からの搬入品かと考えられる土器も存在する。このように瓜生堂遺跡では、今回の調査では確認されなかったが、近江地域からの若干の影響をのぞけば、河内よりも東方の地域からの影響はほとんど確認できず、逆に西側からの影響が非常に強いものであったといえよう。本章第7節で検討する、弥生後期における“土佐産”土器の搬入現象もその一端を示している。

また、下川津B類土器の出土器種・量からみると、大阪府内、特に河内地域では瓜生堂遺跡に第一次的に持ち込まれた土器が、その周辺の拠点集落に第二次的に運ばれたとは考えられないだろうか。

以上のような考えに基づくと、瓜生堂遺跡は生活様式をとまなった瀬戸内地域との人々の交流の拠点としての集落、河内地域における西方地域との窓口的な集落としての一側面を考えることができよう。

同様な傾向は、後続する時期における土器移動・交流にみられる現象整理と連動性をもつことになる。すなわち、弥生時代後期末～庄内式期前後では、河内地域は吉備地方を中心とする西日本各地からの、大和地域は纏向遺跡が示すように東海地方をはじめとする東日本からの、交流におけるそれぞれの玄関口としての役割をになったと一般的に理解されている。この段階では、「吉備型甕」をはじめとする搬入土器の分析から判断すると、河内地域においては八尾市中田遺跡群等が重要な位置を占めた窓口拠点であった（秋山2002、同近刊、ほか）。一方、西方からの玄関口としての前史ともなる弥生後期前半段階では、その遺跡群よりさらに北側にあたる河内湖南岸域の瓜生堂遺跡が最も大きな役割をはたしていたことになる。このような実態が、今回の讃岐地域からの搬入品である下川津B類土器の検討によってあらためて提示できたことになる。

〔註〕

本稿での集成作業は弥生後期段階を対象としたため、確実に庄内式～布留式期以降に属する資料に関しては除外している。

〔引用・参考文献〕

- 秋山浩三 1986 a 「河内からもち運ばれた土器」『長岡京古文化論叢』 同朋社
1986 b 「土製品」『亀井（その2）』（財）大阪文化財センターほか
1989 「『河内系』土器について」『京都府弥生土器集成』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
2002 「摂河泉の吉備系土器」『邪馬台国時代の吉備と大和』 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
近刊 「吉備・近畿の交流と土器」『古墳出現期土師器の年代学的研究』（仮題）（財）大阪府文化財センター
今里幾次 1977 「播磨の雲母土器」『考古学研究』23-4 考古学研究会
今里幾次・松本正信ほか 1984 「龍野市とその周辺の考古学資料」『龍野市史』4 龍野市
大久保徹也 1990 「下川津跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団
1995 「上天神遺跡の「在地」土器と「搬入」土器」『上天神遺跡』 香川県教育委員会ほか
（財）大阪府文化財調査研究センター 1995 『摂河泉発掘資料精選』
（財）大阪文化財センター 1981 『巨摩・瓜生堂』
1984 『亀井遺跡Ⅱ』
大野 薫 1992 「瓜生堂遺跡北東辺部の調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第25回）資料』
香川県教育委員会ほか 1995 『上天神遺跡』
岸本道昭 1998 「播磨弥生後期前半土器の実体と編年」『小神辻の堂遺跡』 龍野市教育委員会
高槻市教育委員会 1995 「芥川遺跡発掘調査報告書」（高槻市文化財調査報告書18）
1996 『古曾部・芝谷遺跡』（高槻市文化財調査報告書20）
都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店
寺沢 薫 1974 「大阪湾沿岸地域における弥生時代遺跡群の展開とその社会（上・下）」『古代学研究』72・73 古代学研究会
西谷 彰 1999 「弥生時代における土器の製作技術交流」『待兼山論叢』33 大阪大学大学院文学研究科
畑 暢子 1998 「第8項 まとめ」『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』（財）大阪府文化財調査研究センターほか
東大阪市教育委員会 2002 『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』
藤田憲司 1984 「『搬入土器』研究の課題-巨摩・瓜生堂遺跡報告の検討から-」『大阪文化誌』17 （財）大阪文化財センター
松下 勝 1990 「播磨の中の四国系土器」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』 今里幾次先生古稀記念論文集刊行会
渡辺 昇 1990 「長越遺跡における土器の搬入形態」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』 今里幾次先生古稀記念論文集刊行会

〔図・表・写真出典〕

図437：香川県教育委員会ほか1995から作成、図438：秋山2002、本報告書掲載図から作成（本報告以外の原出典は大野1992、大阪文化財センター1981、同1984、高槻市教育委員会1995、同1996）、図439：東大阪市教育委員会2002、本報告書掲載図から作成、図440：新規中川作成、表32：新規中川作成、写真12～14：新規秋山撮影・作成

〔謝辞・付記〕

本稿の準備等において、大久保徹也、大野薫、福永信雄、山田隆一、大阪府教育委員会ほかの各氏・機関からご援助を得た。また、内容の一部は、第8回瓜生堂（近鉄）勉強会（2003年5月22日）の発表内容に基礎をおいている。さらに、当センター主催の「古墳出現期の土師器と実年代」第9回準備会（2001年6月24日）において、関連土器を持参し紹介する機会があった。両日の検討では各氏から多くのご教示をいただいた。末筆ながらあわせて深謝申しあげたい。なお、本稿は両名の協議のもと、執筆は1・3を中川、2・4を中川・秋山が分担し、全体的な調整や除加筆等は秋山がおこなった。